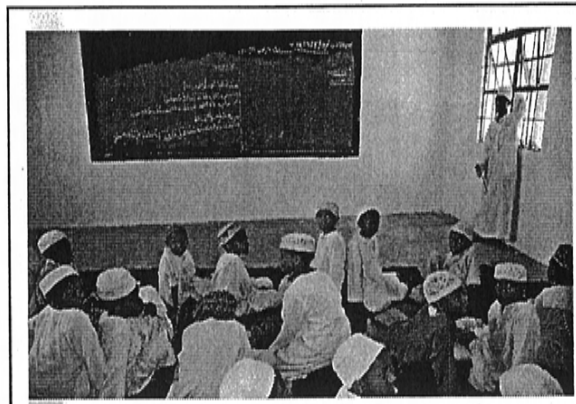


A-19



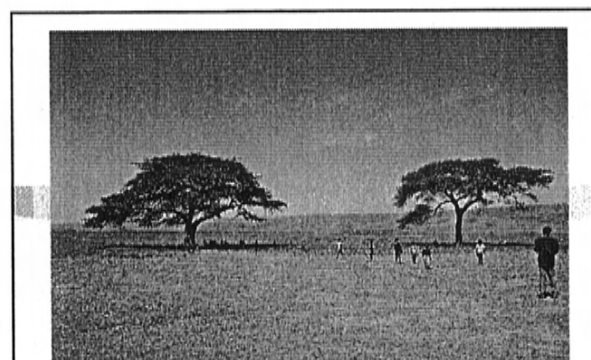
ラムの町のマドラサ(リヤダモスク付属ムスリムアカデミー)

A-20



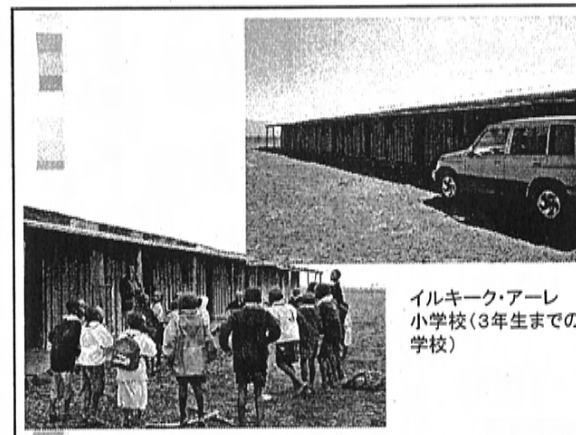
ラムの町のマドラサの1年生(2006年7月)

A-21



ケニア・ナロック県のマサイランドの2本の木

A-22



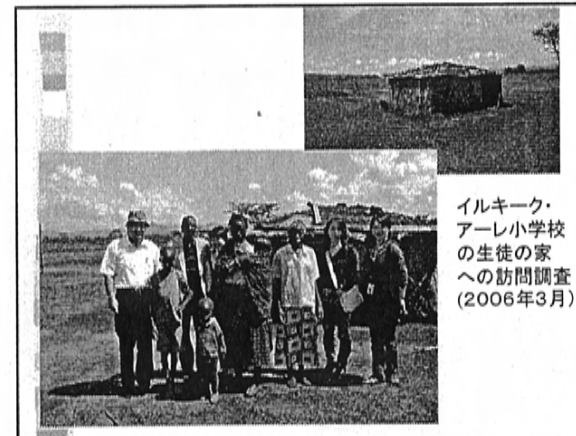
イルキーク・アーレ小学校(3年生までの学校)

A-23



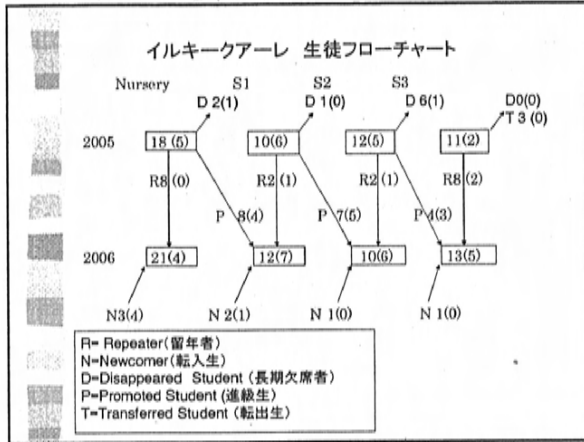
イルキークアーレ小学校1年生(2006年3月)

A-24



イルキーク・アーレ小学校の生徒の家への訪問調査(2006年3月)

A-25



A-26

1、開発途上国の教育課題

- 初等教育就学率の停滞
- 中等・高等教育の停滞
- 多文化・多言語社会
- 地域格差・男女格差
- 学歴インフレへの対応
- 紛争と災害への対応

A-27

2、国際教育協力とは何か

- 教育とは: 人間社会が形成されるための不可欠で普遍的な要因
- 個人にとっての教育: 自己の能力を開花させ社会に参加する活動
- 教育の普遍性:
学校教育から生涯教育
公教育とノンフォーマル教育の並存

A-28

3、公教育について

- 公費による公教育制度
- 公教育制度の普遍主義的な側面と伝統との乖離
- 近代化と教育: 政治、経済、社会文化の近代化と教育のあり方
- 日本と開発途上国の教育の近代化の類似性と差異

A-29

4、経済開発と教育

- 開発のための教育
Education for Development
- マンパワー理論、人的資源論、人的資本論など
- 経済開発と国民形成
- 教育開発予算不足—海外からの支援:
- 職業教育と高等教育へのニーズ
- 80年代後半: 経済開発から教育開発のための教育支援へ

A-30

5、国際教育協力の領域と課題

- 教育協力: ODA全体の10~15%
国際協力の重点目標
日本でもこの10年で重視
- 国際教育協力の目標:
EFAの達成
教育における男女格差の解消

A-31

6、万人のための教育世界会議

- 1990年、タイ ジョムチェンで開催
- 参加：政府155、国際機関20、NGO150 およそ1500人が参加
- 「万人のための教育世界宣言—基礎的な学習のニーズを満たす—」を採択
- 教育開発の強化、教育分野への支援の強化
- 会議の意味：教育の普及が「理念」から「政策目標」へ。「基礎教育」重視の流れ

A-32

7、EFAの意味—60年代との違い

- 60年代のユネスコの教育普及活動(カラチプラン、アジスアベバプラン、サンチャゴプラン)との違い
- 開発の意味が変わった
- 行動目標の作成を含む政策目標へ
- 2国間援助から援助協調へ

A-33

8、2006年サミット提言

- 「21世紀における革新を生み出す社会のための教育」
- 教育大臣会合：MDGsの確認、生涯学習、科学技術教育の促進、
- 教育の質的側面の重視の流れが強まる。

A-34

9、途上国の理数科教育の課題

- カリキュラムの整合性
- 教科内容の不適切さ
- 教員の質：教員養成と研修
- 教科書：海外の出版社のものが多い
- 学習環境：建物、設備
実験器具のimprovisation
- 試験制度：厳格な試験システム

A-35

10、日本の協力の可能性

- 日本の教員の特性
教員の教科内容の理解が高い
教授法への高い関心：活発な授業研究
- 教員研修制度
制度(設備とシステム)
校内研修
- 教材の研究と開発への志向性

A-36

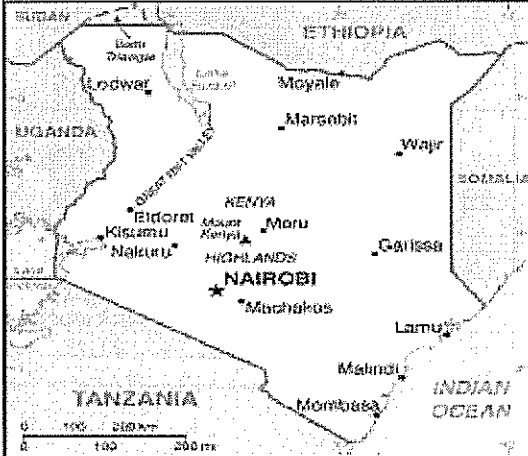

11、日本の教育協力の課題と対策

- プロジェクトの多様性の確保：複雑で多様な社会の中の多様な教育と言う視点の必要性
- 人材の養成と確保：国際的に発言できる人材の養成
- 経験の体系化：日本の経験の相対化
- 日本の教育への還元：途上国経験の相対化



アフガニスタン、バーミアン、チャブダラ村にて(2006年8月)
ご静聴ありがとうございました。

【JICA の取り組み事例 ケニア SMASSE】

案件名：ケニア中等理数科教育強化計画（フェーズ 2） Strengthening of Mathematics and Science in Secondary Education (SMASSE) Phase2	
<p><ケニア基本情報></p> <ul style="list-style-type: none"> ○人口 3,107 万人 ○ 1人当たり GDP 393 US\$ ○人間開発指数順位 177 カ国中 148 位 ○初等教育純就学率 69.9% (女性 70.5%) ○成人識字率 84.3% (女性 78.5%) ○平均寿命 45.2 歳 <p>(UNDP 「人間開発報告」, 2004、UNESCO 「EFA Global Monitoring Report」, 2005)</p> <p><プロジェクト基本情報></p> <p>期間：2003 年 7 月～2008 年 6 月</p> <p>相手国機関：</p> <p>監督機関 教育科学技術省</p> <p>実施機関 ケニア理数科教員養成大学内に SMASSE INSET UNIT を設置</p> <p>プロジェクト目標：(ケニア国内) 現職教員研修によりケニアの中等教育レベルの理数科教育が強化される。(域内連携) SMASSE-WECSA メンバー国の教員養成機関及び中等学校で ASEI/PDSI 授業が実施される。</p>	<p><地図></p> 
<p>概要</p>	<p>2020 年までに産業構造を工業化することを目標としているケニアでは低迷する初・中等教育における理数科教育の改善が緊急の課題とされています。この課題に取り組むため、日本政府はケニア政府の要請を受け、中等理数科現職教員研修を通じた理数科教育の改善を目標とする「中等理数科教育強化計画 (SMASSE)」を 9 デイストリクトを対象に 1998 年から 5 年間実施しました。SMASSE では、中等理数科目における教師中心ではなく生徒中心の教授法・学習法として実験・実習の実施及び教師の創意工夫の促進を目指す ASEI (Activity, Student, Experiment, Improvisation) と呼ばれる授業改造アプローチを導入しています。また、教員の授業内容や生徒の到達度のモニタリングを通し、ASEI アプローチに基づく授業の計画を改善していく PDSI (Plan, Do, See, Improve) というサイクルの定着化を推進してきました。5 年間の活動の結果、現職教員研修システムが中央及び地方で構築され、非対象地域と比較した場合、教員研修による授業改善 (ASEI/PDSI) と教員の質の向上に対するインパクトが認められました。この成果はケニア全国に広まり、本研修の全理数科教員への実施を望む声があがり、2003 年よりフェーズ 2 が始まりました。また、ASEI/PDSI 活動は、理数科教育の低迷という同様の問題を抱えるアフリカ諸国へも普及されるべきであるという要望が高く、2001 年に SMASSE プロジェクトを事務局として域内連携ネットワーク「SMASSE-WECSA」が設立されました。このようなフェーズ 1 での成果を踏まえ、SMASSE フェーズ 2 では、ASEI/PDSI アプローチに基づく①研修事業のケニア全国での実施と②理数科授業改善運動のアフリカ周辺諸国への波及を 2 本柱とし活動を行っています。</p>
<p>主な活動</p>	<div style="text-align: right; margin-bottom: 10px;">  </div> <p>(ケニア国内)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 現職教員を対象にした中央・地方研修の実施 ● 理数科科目の現職教員研修に関するカリキュラム開発、教材開発、地方研修指導員の養成、研修のモニタリング・評価を実施 ● 教育行政、学校運営に携わる行政官、学校運営者に対する研修を実施 <p>(域内連携)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● SMASSE-WECSA メンバー国の研修指導者を対象とする研修のためのカリキュラム及び教材開発、研修及びモニタリング・評価の実施 ● ニュースレター等の情報発信、合同ワークショップ・国際会議等の開催 ● 理数科の教育・学習に関する ASEI/PDSI アプローチの啓発活動 ● ADEA 理数科ワーキンググループにおける中心的メンバーとしての調査研究等
<p>特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● ASEI/PDSI アプローチに基づく授業改善についての教員研修を通し、理数科教育強化を目指しています。 ● ケニア国内だけでなく、アフリカ域内に広がり、SMASSE-WECSA ネットワークには現在 23 カ国が参加、第三国研修、域内ワークショップ等を開催しています。 ● カウンターパートの増員、予算配分の増加、施設提供等ケニア側の強いオーナーシップが示され、またプロジェクト運営におけるケニア側の自主性が育ってきており、自立発展性の点でも優れています。 ● ADEA・NEPD・WSSA などの枠組みでアフリカ域内協力を開始しています。また、アフリカのみならずフィリピン大学などアジアの機関とも連携しています。